

2/1 Sat.

第274回 土曜マチネーシリーズ  
東京オペラシティ コンサートホール 14時開演  
SATURDAY MATINÉE SERIES No.274 / Tokyo Opera City Concert Hall 14:00

2/2 Sun.

第274回 日曜マチネーシリーズ  
東京オペラシティ コンサートホール 14時開演  
SUNDAY MATINÉE SERIES No.274 / Tokyo Opera City Concert Hall 14:00

指揮  
Conductor  
特別客演コンサートマスター  
Special Guest Concertmaster

シューマン  
SCHUMANN

シューマン  
SCHUMANN

[休憩]  
[Intermission]

モーツァルト  
MOZART

**ローター・ツァグロゼク** -p.5

LOTHAR ZAGROSEK

日下紗矢子  
SAYAKO KUSAKA

**〈マンフレッド〉序曲** [約12分] -p.8

“Manfred” Overture

**交響曲 第4番** 二短調 作品120 [約28分] -p.9

Symphony No. 4 in D minor, op. 120

I. Ziemlich langsam – Lebhaft – II. Romanze : Ziemlich langsam –  
III. Scherzo : Lebhaft – IV. Langsam – Lebhaft

**交響曲 第41番** 八長調 K. 551 **〈ジュピター〉**

[約31分] -p.10

Symphony No. 41 in C major, K. 551 “Jupiter”

I. Allegro vivace  
II. Andante cantabile  
III. Menuetto: Allegretto  
IV. Molto allegro

2/7 Fri.

第645回 定期演奏会  
サントリーホール 19時開演  
SUBSCRIPTION CONCERT No.645 / Suntory Hall 19:00

指揮  
Conductor  
特別客演コンサートマスター  
Special Guest Concertmaster

ブルックナー  
BRUCKNER

**ローター・ツァグロゼク** -p.5

LOTHAR ZAGROSEK

日下紗矢子  
SAYAKO KUSAKA

**交響曲 第5番** 変ロ長調 WAB105 (ノヴァーク版)

[約81分] -p.12

Symphony No. 5 in B flat major, WAB105 (Nowak Edition)

I. Introduction: Adagio – Allegro  
II. Adagio, Sehr langsam  
III. Scherzo: Molto vivace (Schnell)  
IV. Finale: Adagio – Allegro moderato

※本公演には休憩がございません。あらかじめご了承ください。

\*No intermission

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））

文芸春秋 独立行政法人日本芸術文化振興会

**芸劇&読響ジュニア・アンサンブル・アカデミー プレ・コンサート**

2月2日(日)の《第274回 日曜マチネーシリーズ》では、開演前の13時25分から、「芸劇&読響ジュニア・アンサンブル・アカデミー」の受講生によるプレ・コンサートをコンサートホールで開催します。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））

文芸春秋 独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：アフラック生命保険株式会社

2/27 Thu.

第679回 名曲シリーズ  
サントリーホール 19時開演  
POPULAR SERIES No.679 / Suntory Hall 19:00

指揮  
Honorary Guest Conductor

ピアノ  
Piano

コンサートマスター  
Concertmaster

芥川也寸志  
AKUTAGAWA

ショスタコーヴィチ  
SHOSTAKOVICH

[休憩]  
[Intermission]

ショスタコーヴィチ  
SHOSTAKOVICH

尾高忠明 (名誉客演指揮者) -p.6  
TADAAKI OTAKA

辻井伸行 -p.7  
NOBUYUKI TSUJII

林 悠介  
YUSUKE HAYASHI

交響管弦楽のための音楽 [約12分] -p.15  
Musica per Orchestra Sinfonica  
I. Andantino  
II. Allegro

ピアノ協奏曲 第1番 八短調 作品35 [約21分] -p.16  
Piano Concerto No. 1 in C minor, op. 35  
I. Allegro moderato  
II. Lento  
III. Moderato  
IV. Allegro con brio  
ソロ・トランペット=辻本憲一 (読響首席)  
Solo Trumpet = KENICHI TSUJIMOTO (YNSO Principal)

交響曲 第5番 二短調 作品47 [約44分] -p.17  
Symphony No. 5 in D minor, op. 47  
I. Moderato  
II. Allegretto  
III. Largo  
IV. Allegro non troppo

指揮

ローター・ツァグロゼク  
LOTHAR ZAGROSEK, Conductor

ツァグロゼクが振る  
〈ジュピター〉 &  
ブルックナー5番



©読響

ドイツの巨匠ツァグロゼクが約6年ぶりに読響の指揮台に登場。古典から現代作品まで幅広いレパートリーを誇り、ドイツ・オーストリア音楽で定評のあるツァグロゼクが、モーツァルトやブルックナーの傑作を指揮する。

1942年バイエルン州に生まれ、H. スワロフスキー、B. マデルナ、カラヤンらに師事。パリ・オペラ座、ライプツィヒ歌劇場の音楽総監督、ベルリン・コンツェルトハウス管の首席指揮者などを歴任。97年にシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督に就任し、ノーノやラッヘンマンらの現代オペラやワーグナー〈ニーベルングの指環〉などを指揮して絶賛された。2006年までの在任期間に、同歌劇場は権威ある専門誌『オーパヴェルト』の「年間最優秀歌劇場」に5度選ばれ、さらに本人は同誌の「年間最優秀指揮者」に3度選出されている。

これまでにベルリン・フィル、フランス国立管、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、ロイヤル・コンサートヘボウ管、ロンドン・フィルなどと共演している。また、ウィーン国立歌劇場、ハンブルク歌劇場、英国ロイヤル・オペラ、ザルツブルク音楽祭などで活躍。録音も数多く、シュレーカーの歌劇〈烙印を押された人々〉をはじめとするデッカ・レーベルの「退廃音楽」シリーズのほか、ラッヘンマンの歌劇〈マッチ売りの少女〉などがある。

音楽教育や若手の育成にも情熱を注いでおり、ドイツ音楽評議会指揮フォーラム芸術諮問委員会の会長を務める。17年にはドイツ連邦共和国の一等功労十字章を授与された。読響には16年、19年に続き、3回目の登場。

2/1  
土曜マチネー

2/2  
日曜マチネー

2/7  
定期

Maestro

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団  
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））  
独立行政法人日本芸術文化振興会  
※本公演では日本テレビの収録が行われます。

指揮

**尾高忠明**

(名誉客演指揮者)

TADAAKI OTAKA, Honorary Guest Conductor

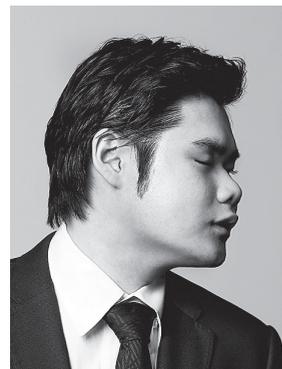
円熟のタクトで  
ショスタコーヴィチ  
作品の神髄に迫る

©Martin Richardson

国内外の名だたるオーケストラと共演を重ねてきた日本を代表する名匠。読響とも数々の名演を生んだ熟達のタクトで、芥川也寸志、ショスタコーヴィチ作品を振り、圧倒的なクライマックスへと導く。

1947年生まれ。桐朋学園大学、ウィーン国立アカデミーで学んだ後、東京フィル常任指揮者(74~91年/現・桂冠指揮者)に就任。BBCウェールズ響首席指揮者(87~95年/現・桂冠指揮者)を務め、イギリス音楽を手がけた。

読響では92~98年に第6代常任指揮者を務め、現在は名誉客演指揮者の地位にある。札幌響音楽監督(2004~15年/現・名誉音楽監督)、メルボルン響首席客演指揮者(10~12年)、新国立劇場オペラ芸術監督(10~14年)を歴任。現在は大阪フィル音楽監督、N響正指揮者、紀尾井ホール室内管桂冠名誉指揮者。21年から「東京国際指揮者コンクール」審査委員長を務めている。国内の主要楽団のほか、世界各地の楽団に客演。大英勳章CBE、英国エルガー協会から日本人初のエルガー・メダルなどを授与される。サントリー音楽賞、有馬賞(N響)、北海道文化賞、関西音楽クリティック・クラブ賞本賞、大阪文化祭賞、日本放送協会放送文化賞、JXTG音楽賞洋楽部門本賞など受賞多数。21年秋には、旭日小綬章を受章。後進の指導にも力を入れ、東京芸術大学名誉教授、相愛大学および京都市立芸術大学客員教授、国立音楽大学招聘教授、桐朋学園大学特命教授を務めている。



©Yuji Hori

ピアノ

**辻井伸行**

NOBUYUKI TSUJII, Piano

日本国内にとどまらず、世界を舞台に活動を展開するピアニスト。テレビなどにも多数出演し、国民的アーティストとして人気を博している。2009年、アメリカのヴァン・クライバーン国際コンクールで日本人として初優勝。05年のショパン国際コンクール・ポーランド批評家賞など受賞多数。ベルリン・ドイツ響やマリインスキー劇場管、ハンブルク・フィルなどと度々共演するほか、カーネギー・ホールをはじめとする世界の一流ホールでリサイタルを行うなど国際的に活躍。日本でも読響をはじめとする国内主要楽団と共演するほか、ロンドン・フィルやオスロ・フィルなどと国内ツアーを行い、好評を博している。22年にはハリウッド・ボウルでロサンゼルス・フィルと共演、23年にはBBCプロムスに再登場して成功を収めた。

## シューマン 〈マンフレッド〉序曲

「これまで〈マンフレッド〉以上に愛と力を込めて書いた作品はない」。音楽と文学を重ね合わせながら作曲してきたロベルト・シューマン（1810～56）は、自身の晩年を迎えて、友人でヴァイオリニストのヴァジエレフスキにこう語った。ヴァジエレフスキはシューマンが音楽監督を務めたデュッセルドルフ市管弦楽団のコンサートマスターで、のちにシューマンの最初の伝記を書くことになる。

そもそも『マンフレッド』とは、イングランドの貴族で詩人のバイロン卿（1788～1824）が1817年に書いた劇詩で、舞台上演のための戯曲というよりは、読まれることを目的とした脚本形式の文学作品である。スイスの貴族マンフレッドは社会を捨ててアルプスの山に引きこもり、最愛の人アスタルテを失った罪の意識に苦しみ、行き場を模索して葛藤する。1829年3月、二十歳前のシューマンはすでに、このバイロンの詩劇に強く惹かれた。

その後シューマンが『マンフレッド』に向き合うのは1848～49年である。『マンフレッド』はバイロン自身が「形而上学的ドラマ」と評したように、本来舞台映えする作品ではないのだが、シューマンは「音楽付きの劇的な詩」として、語り手、独唱、合唱、オーケストラによる、序曲と15曲からなる劇付随音楽を作曲した。しかし、独特な編成による特殊な作品であることから、全曲が演奏されることはめったになく、現在では優れた序曲のみが親しまれている。

序曲は序奏付きのソナタ形式（提示部—展開部—再現部）を採る。冒頭の3つの和音で、打ちひしがれた主人公が暗示され、悲痛な響きで展開していく。テンポが速まると、主部は苦悩と葛藤を思わせる激情的な主題と亡くなった恋人への憧れを想起させる主題によって組み立てられる。中間では精霊や魔女を暗示させる響きが現れる。最後はマンフレッドの死を暗示するように終わる。

〈稲田隆之 音楽学〉

作曲：1848～49年／全曲初演：1852年6月13日、ワイマール宮廷劇場／演奏時間：約12分  
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

## シューマン

### 交響曲 第4番 二短調 作品120

ロベルト・シューマンは第1番から第4番まで、生涯に4つの交響曲を作曲した、と言いたいが、実態はそれほど単純ではない。シューマンは交響曲第1番〈春〉の完成直後、1841年5月に新しい管弦楽曲の作曲に着手し、10月には完成させる。それが現在の第4番に当たるのだが、このときシューマンの念頭にあった作品名は「交響的幻想曲」だった。

いわゆる「交響曲の年」に当たる1841年には「交響的幻想曲」のほか、〈序曲、スケルツォとフィナーレ〉という交響曲のようで交響曲ではない作品や、「ピアノと管弦楽のための幻想曲」（のちのピアノ協奏曲 イ短調）といった実験作が作曲されている。しかし1841年12月6日、「交響的幻想曲」の初演では、聴衆の評価は芳しくなく、10年間、お蔵入りとなってしまふ。

その後1851年に「交響的幻想曲」は改訂に着手され、さらに2年後にシューマン自身の指揮により初演された。1853年の出版の時点で、すでに「第2番」と「第3番〈ライン〉」が完成・出版されていたため、「第4番」という番号が付いた。ただしその作品名は、最終段階まで「交響的幻想曲」だったことが分かっている。交響曲第4番の本質は、緻密に構築された全4楽章の「交響曲」と、自由な発想で音楽が紡がれる「幻想曲」の融合、という挑戦的な構想にある。

4つの楽章は切れ目なく演奏され、かつ、第1楽章の音楽は第2楽章や第4楽章へ流れ込み、全曲の統一が図られている。**第1楽章**は、哀愁を帯びた序奏ときびきびとした響きが基調となる主部からなる。**第2楽章**は緩徐楽章で、オーボエとチェロが切々と歌う旋律が印象的。**第3楽章**はスケルツォで、激しいリズムの主部と叙情的な中間部の対比が特徴。**第4楽章**は舞踏的なリズムが際立ち、祝祭的な音楽が繰り上げられる。

〈稲田隆之 音楽学〉

作曲：1841年および1851年（改訂）／初稿初演：1841年12月6日、ライプツィヒ、改訂稿初演：1853年12月30日、デュッセルドルフ／演奏時間：約28分  
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

## モーツァルト 交響曲 第41番 八長調 K.551 〈ジュピター〉

1788年にヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）が作曲した最後の3つの交響曲——第39番 変ホ長調、第40番 ト短調、第41番 八長調〈ジュピター〉——は、交響曲の新しい時代を告げている。当時の交響曲は、3～4時間にも及ぶ長大なコンサートの開幕の音楽だったが、徐々に、じっくり聴かれる音楽へと変容しようとしていた。

そのいわゆる三大交響曲は、創作の背景や当時の演奏記録などについて不明なことが多く、さまざまな憶測を呼んだ。しかし、当時の慣習やいくつかの状況証拠から、ある程度のことばが分かってきている。3つの交響曲の完成日はそれぞれ1788年6月26日、7月25日、8月10日である。立て続けに完成された事実からは、3つの交響曲が何らかのセットだったことを窺わせ、また、かなり急いで作曲が進められたことが推測される。3曲セットでは通常、個性の異なる作品が集められるが、モーツァルトの三大交響曲もその例外ではない。

実は、その前年の1787年にウィーンの出版社アルタリア社は、ヨーゼフ・ハイドンによる6曲の「パリ交響曲」のうち、第82番 八長調〈熊〉、第83番 ト短調〈めんどり〉、第84番 変ホ長調を3曲セットで出版している。この調性が、順番こそ逆だが、モーツァルトの三大交響曲の調性と同じなのは偶然ではないだろう。モーツァルトは、ハイドンの3つの交響曲に刺激を受けたにちがいない。

そしてモーツァルトの時代、演奏を前提としない作曲はまず考えられない。したがって、1788～89年のシーズンに演奏されるべく作曲されたと考えるのが自然である。三大交響曲のうち第40番は、モーツァルトがウィーンで親密に交流したスヴィーテン男爵の主催するコンサートで演奏されたことが、今から14年ほど前に判明している。第39番と第41番〈ジュピター〉が演奏された記録は残念ながら残っていないが、三大交響曲が作曲されたきっかけはスヴィーテン男爵だった可能性が高い。また、三大交響曲作曲の目的として、そのコンサート用に加えて、ロンドンでの出版用という説も有力視されている。

なおモーツァルトの生前に、第41番〈ジュピター〉が演奏された可能性のある演奏会が二つある。ひとつは1789年5月12日、ライブツィヒのゲヴァントハウスに

おける演奏会で、もうひとつが1790年10月15日、フランクフルトでの演奏会である。いずれのプログラムにもモーツァルトの「交響曲」が入っており、時期的に彼の手元にあった楽譜は、三大交響曲の可能性が高い。

モーツァルトの死後まもなく、〈ジュピター〉は「フーガ付きフィナーレのある交響曲」としてドイツ語圏で有名となっていた。〈ジュピター〉の愛称はモーツァルト自身によるものではなく、彼の死後、ロンドンの興行主ザロモンによる命名とされる。ジュピターとはギリシャ神話のゼウスのことで、作品の壮かさ、荘厳さ、輝かしさから、この作品に相応しい愛称であることは間違いない。なおザロモンといえば、人気作曲家のハイドンに12曲の交響曲を委嘱し、ロンドンで一大ブームを巻き起こした人物として知られている。

全曲は4つの楽章からなる。**第1楽章**はソナタ形式（提示部—展開部—再現部）によって堂々と組み立てられる。力強いユニゾンの3連打と優美な旋律の対比が特徴。**第2楽章**は穏やかな緩徐楽章で、歌謡的な旋律がのびのびと歌われる。一方、中間部の仄暗く厳しい響きが残る印象を残す。**第3楽章**のメヌエットは3拍子の典雅な舞曲で、その旋律にはさりげない半音階の技巧が光る。**第4楽章**は、ほぼ全体が精緻なポリフォニー——独立した複数の主題が同時に鳴り響く書法——によって組み立てられる。残り1分ほどで最後のフーガとなり、この楽章で登場した5つの動機が、追いかけていながら同時に鳴り響く。西洋音楽史上、奇跡ともいべき至高の瞬間がここにある。

〈稲田隆之 音楽学〉

作曲：1788年／初演：不明／演奏時間：約31分

楽器編成／フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

## ブルックナー

## 交響曲 第5番 変口長調 WAB105 (ノヴァーク版)

アントン・ブルックナー (1824~96) の交響曲は、いまやコンサートシーンに欠かせないレパートリーである。それはウィーン古典派に始まるドイツ交響楽の、19世紀における終着点であると同時に、ワーグナーの半音階的書法と20世紀音楽との間をつなぐ、橋渡しの存在と言えよう。

もっとも「人気度」には、全9曲 (いわゆる第0番と習作も入れると11曲) でまだムラがありそう。第5番はというと、最高傑作とする人たちがいる一方で、第4や第7は好きだけど……と敬遠する向きもある。それだけ、ブルックナーとしてもユニークな作品なのだ。なんといっても終楽章の規模と書法であろう。主題が通常の3つではなく、4つを数えるし、現代音楽にも接近したフーガがある。いま一つは、この作曲家の魅力のひとつである緩徐楽章が、逆に比較的小規模である点。第1楽章が、険しい序奏で始まるのも、彼の他の交響曲にない特徴だ。

作曲は1875年に始まり、いったん78年に終わっているが、1887年までに若干の手直しがあった模様。ただし複数の異稿はなく、完成稿は一つしかない。同年、弟子のヨーゼフ・シャルクの手になる2台ピアノのための編曲版によって全曲演奏がウィーンで行われた。ブルックナーはこれに立ち会ったが、1894年、グラーツにて弟のフランツ・シャルクの指揮でオーケストラ初演が行われた際には列席できず、結局、本作を一度も完全なかたちで聴くことなく2年後の1896年に世を去った。

グラーツに行けなかったのは、しかし幸いだったかもしれない。フランツ・シャルクが編み、作曲者の死の年に出版したスコアから察するに、大幅な改変 (編曲) がなされていた可能性があるからだ。終楽章のコーダ終盤で金管楽器を補強する点については、ブルックナーも了解していたようだが、オーケストレーションの大幅な変更や大胆なカットまで認めていたかどうか。本日は、ブルックナーの手になるオリジナル稿で聴く。

**第1楽章** アダージョの序奏は、V字型に下行しては上行する弦のピッツィカート (①) で始まる。最初の総奏の直後にくる金管コーラルに注意しよう。そのバス声部のV字ライン (②)こそは、この交響曲の「萌芽」。アレグロ主要主題 (③) は、②を上下ひっくり返した性格をもつし、歌謡的な第2主題を導くピッツィカート

も②の変形だ。同主題を締めくくるシンコペーションに誘われ、木管楽器が第3主題を軽やかに歌う。展開部は序奏の再現で始まる。

**第2楽章** アラ・プレーヴェ (1小節を2拍でとる) で書かれたアダージョなので、必ずしも緩徐な感じはしない。ピッツィカートの3連符がV字音形を繰り返す (④) ながら、オーボエが始める主要主題 (⑤) は、②の相似形。第2主題 (⑥) は、突如、八長調の弦楽合奏で現れる。これも骨格はV字型。楽章全体は、⑤と⑥が変容しつつ交代して進んでゆく。

**第3楽章** スケルツォ部は④を弓で速く弾いて開始。木管楽器が奏でる主題は、②もしくは⑤に派生している。トリオ部 (中間部) はポルカ風だが、スケルツォ部にもポルカ風の中間部がある。トリオのあとにスケルツォが再帰する。

**第4楽章** アダージョの序奏開始は①に同じ。突如クラリネットが吹くおどけたV字音形は、アレグロ主要主題 (⑦) の先取りだが、⑦が展開する前に、第1楽章の③と第2楽章の④⑤が回想される。それから⑦が、堂々とフーガを開始。だがそれも長くは続かず、歌謡的な第2主題がヴァイオリンで現れる。伴奏する中低弦のピッツィカートは、やはりV字型で、どこか①を思わせよう。第3主題 (⑧) は⑦の亜種であり、むしろ、それが沈静した後に現れる金管コーラルによる第4主題⑨ (= ②の変形) が重要だ。展開部は、この⑨と⑦が二重フーガを成して高揚してゆく。再現部では⑧とともに第1楽章の③が再帰。コーダ以下では、まず③⑦が、次にそこへ⑨が絡み、圧倒的なクライマックスを築く。

〈松本篤也 音楽評論〉

作曲：1875~78年 / 初演：1894年4月8日、グラーツ / 演奏時間：約81分  
楽器編成 / フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

## 芥川也寸志

### 交響管弦楽のための音楽

芥川也寸志（1925～89）は戦後の日本を代表する作曲家のひとり。芥川龍之介の三男として生まれた。2歳で父を亡くすが、遺品の多数のSPレコード、とりわけストラヴィンスキーの〈火の鳥〉や〈ペトルーシュカ〉を愛聴して育ち、東京音楽学校で学んだ。在学中から〈交響三章〉他で注目を集め、1950年のNHK放送開始25周年記念管弦楽曲懸賞で〈交響管弦楽のための音楽〉が特選入選を果たしたことで一躍その名が知られることとなった。作品は近衛秀麿指揮、日本交響楽団（現N響）により初演され、その後、戦後初めて来日したオーケストラであるアメリカのシンフォニー・オブ・ジ・エアにより後楽園スタジアムで再演された。芥川は「スポーティな」この楽曲がスタジアムで演奏されたことをおもしろがった。同公演の指揮者ソーア・ジョンソンは帰国後にアメリカでこの曲を200回以上にわたってとりあげている。明快な旋律や歯切れよいリズムといった芥川作品の特徴は、すでにこの出世作によく表れている。

曲名は「日本語としてはおかしいが、NHKが勝手に訳したもの」（芥川）。欧文タイトルはMusica per Orchestra Sinfonica。NHKの懸賞は芥川の名声を高めたばかりではない。同賞の歌曲部門に密かに応募して落選した当時高校生の岩城宏之は芥川作品の初演を聴き、その夜は興奮のあまり一睡もできず、この衝撃が後に指揮者になった自分を「初演魔」へと駆り立てたと明かしている。ちなみに芥川は懸賞金の20万円で田園調布に家を買ったというから、隔世の感がある。

**第1楽章** アンダンティーノ 気<sup>き</sup>忙<sup>せわ</sup>しく意気揚々とした楽想で始まり、都会的なリリズムを漂わせる。イングリッシュ・ホルンが寂しげな中間部を導く。

**第2楽章** アレグロ シンバルの一撃に続いて、トランペットとトロンボーンが勇壮な主題を奏で、リズムカルでエネルギッシュな楽想がくりひろげられる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1950年／初演：1950年3月21日、日比谷公会堂／演奏時間：約12分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル）、ピアノ、弦五部

## ショスタコーヴィチ ピアノ協奏曲 第1番 八短調 作品35

若き日のドミトリー・ショスタコーヴィチ(1906~75)はピアニストとしての成功を望んでいた。1927年、ワルシャワで開催された第1回ショパン国際ピアノ・コンクールにソ連代表の3人のひとりとして国家の威信をかけて臨んだが、ショスタコーヴィチは優勝を逃すどころか、入賞すらできなかった。優勝者は同じソ連代表のレフ・オポーリン。落胆したショスタコーヴィチだが、以降もしばらくコンサート・ピアニストとして自作や古典を演奏している。1933年のピアノ協奏曲第1番の初演でも自ら独奏ピアニストを務めた。

この協奏曲が異彩を放っているのは、ピアノに加えて、トランペットもソリスト並みに活躍するという点。本来の題は「ピアノ、トランペット、弦楽合奏のための協奏曲」で、二重協奏曲の性格を持つ。古典的なフォーマットにユーモアやシニカルな笑い、パロディ精神がふんだんに盛り込まれている。各楽章は切れ目なく演奏される。

**第1楽章** アレグロ・モデラート コントの始まりのようなおどけた調子で幕を開け、ベートーヴェンの〈熱情〉ソナタの引用が続く。

**第2楽章** レント 一転して神妙なムードが立ちこめる。後半で弱音器付きのトランペットが切々としたソロを奏でる。

**第3楽章** モデラート 独奏ピアノで始まる橋渡しの短い楽章。

**第4楽章** アレグロ・コン・プリオ せわしない主題は、ベートーヴェンのロンド・ア・カプリッチョ〈なくした小銭への怒り〉のパロディ。せわしないトランペットとピアノの応酬により高潮する。中間部のゆったりとしたトランペット・ソロはイギリスのわらべ歌からの引用。気まぐれなピアノ・ソロにトランペットが合いの手を入れて猛然と突進し、狂騒的に曲を閉じる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1933年／初演：1933年10月15日、レニングラード／演奏時間：約21分  
楽器編成／弦五部、独奏トランペット、独奏ピアノ

## ショスタコーヴィチ 交響曲 第5番 二短調 作品47

1936年1月28日、ソ連共産党の機関紙「プラウダ」は、ショスタコーヴィチのオペラ〈ムツェンスク郡のマクベス夫人〉を音楽史に残る有名な言葉で評した。「音楽ではなく荒唐無稽<sup>ことうむげい</sup>」。記事は作品を「粗野で原始的で下品」と批判し、ショスタコーヴィチのみならずソヴィエト音楽界全体のモダニズム的傾向に対して厳しく警告を発した。それまでは「ソヴィエト文化の最高の伝統のなかで育った」と称賛されていた作品が、一転して批判の対象になったのである。ショスタコーヴィチは交響曲第4番を書き上げるものの、リハーサルの段階であまりに野心的と考えて作品を撤回する。スターリン政権下で友人や知人たちが粛清<sup>しよくせい</sup>されるなか、1937年4月、ショスタコーヴィチはより明快で古典的なスタイルで書かれた交響曲第5番の作曲に取り組む。作品はソヴィエト連邦作曲家同盟の予備審査を経たのち、11月に初演された。

初演はセンセーショナルな成功を収めた。第3楽章のラルゴでは人々が声をあげて泣き、終楽章の終わりが近づくと聴衆が一人また一人と起立して、曲が終わると爆発的な喝采がわき起こったという。聴衆の熱狂はむしろ当局への挑戦とみなされることを関係者たちは危惧したが、作品は「正当な批判に対するソヴィエト芸術家の創造的返答」と評され、ショスタコーヴィチは名誉を回復した。

**第1楽章** モデラート 鋭く厳かな弦楽器の掛け合いで開始され、ヴァイオリンの不安げな主題が続く。軍楽調の行進曲を交錯させながら緊迫感を高める。

**第2楽章** アレグレット グロテスクなスケルツォ。中間部はレントラー風。

**第3楽章** ラルゴ ゆったりとした荘重な楽想が、痛切な悲しみを表現する。

**第4楽章** アレグロ・ノン・トロツポ けたたましく開始され、金管楽器が荒々しい主題を強奏する。最後に訪れるのは勝利、あるいは勝利のパロディだろうか。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1937年／初演：1937年11月21日、レニングラード／演奏時間：約44分  
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、エスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、シロフォン、グロッケンシュピール、銅鑼)、ハープ2、ピアノ、チェレスタ、弦五部